

令和8年度 第1回岐阜県社会教育委員の会 議事録要旨

1 日時 令和8年6月5日（金）9：30～11：00

2 場所 岐阜県庁 会議室2003

3 出席者（委員の現在数14人 出席者14人）

<委員>

天野 知子
井上 吉博
岩田 睦巳
裁 昭人
戸上 仁美
野田 和江
橋本 佳奈
堀江 弘美
益川 浩一
馬淵 浩史
森下 珠美
守屋 朋伸
山本 真紀
米原木ノ実

<事務局>

環境エネルギー生活部部長	田口 博史
県民生活課長	桂川 義彦
生涯学習企画監	平工 雅之
課長補佐兼係長	深見 玲子
課長補佐	渡辺 史子

4 議事

（1）令和8年度の社会教育関連事業について

○事務局より説明

益川議長：昨年度に引き続き、岐阜県と岐阜大学で共同設置している「ぎふ地域学校協働活動センター」事業で、地域と学校との連携を進めていく。5月29日に県主催で実施された公民館研修会の報告があったが、岡山市は公民館活動がとても活発な地域である。よい研修ができたのではないかと推測する。また、冒頭に説明があった社会教育主事講習であるが、今年度は愛知教育大学で開催され、私も少し関わらせていただく。事務局の説明に質問・ご意見等ないか。

井上委員：必置であるはずの社会教育主事の県内市町村行政の配置率が低い現状について、従来は社会教育主事講習を受講し修了した教員が教育委員会に配置されていた。今後は社会教育士資格をもつ教員、行政職員を増やす方向を県から発信してはどうか。

益川議長：市町村に対して、社会教育法に基づいて社会教育主事の配置をしていただくよう、県

としても進めていただく必要があると考えている。今、「地域づくり」において、社会教育主事・社会教育士の果たす役割はますます大きくなってきている。学校と地域の連携協働からも、社会教育主事・社会教育士の資格をもった教員の育成が必要である。

橋本委員：PTA 連合会の会長と子どもが主体で取り組んでいる活動事例が知りたいと話していたところである。子ども主体でないと、子育て・仕事真最中の大人もあまり動かないのではないかと思うので、ハンドブック Vol.3 を参考にして、PTA でもうまく連携できればと思う。

益川議長：ハンドブック Vol.3 は社会教育委員の皆さんで、丹精込めて作っていただいたものである。非常にいいものだと思自負している。昨年度の会でも意見がでたが、作りっぱなしで終わりではなく、どう普及させていくか、どう使っていくかが大事である。子ども・若者の参画・意見表明もしっかりと捉えながら、社会教育の分野でも取組をさらに促進していければと思う。

森下委員：事務局からも説明があったように、岐阜県子ども会育成連合会が60周年を迎える。岐阜県子ども会育成大会は、7月4日（土）土岐市文化プラザで開催予定である。現在、準備を進めているので、よろしく願いたい。

委員：特に意見なし。

益川議長：社会教育関係団体の補助金交付について、社会教育法第13条において、適切に交付することを期すために、社会教育委員会の意見を聞くと規定がある。質問、意見はあるか。

委員：特に意見なし。

益川議長：事務局からの事業説明、補助金交付説明等について適正であるとする。委員自身も参加したり、協力いただいたりする機会がある。説明のあった社会教育関連事業がよりよく進むよう、気付いた点等があればその都度ご意見を頂戴したい。

（２）次期審議題について

○事務局より説明

益川議長：子ども・若者の参画というところに焦点をあてながら、地域と学校の連携・協働を議論してきたというような経緯がある。国の政策をそのままというようなことではないが、事務局からの説明の通り、社会教育人材をいかに発掘・育成していくか、ネットワーク化を図っていくかは、社会教育の発展、地域と学校の連携の促進に非常に大切ではないか。副題として「子ども・若者が参加する地域づくり」とあるが、これは案であると理解をしているので、皆様方からいろいろな意見をいただきながら、大まかに次期審議題の方向を決め、次回その審議題を深掘りしていきたいと考えている。審議題について、ご意見をお聞かせ願いたい。

天野委員：地域の方々はもちろんその人自身が学ぶということも大事な社会教育であるが、学んだ成果やこれまで培ってきた知恵や経験を、子どもたちや若者に還元していくことも大事な社会教育であるとする。その意味では、学んだ今までの経験値を生かすとい

う観点から言っても、社会教育人材の発掘・育成において幅広い対象を見据えて社会教育のあり方を議論できるのではないかな。

副題で「子どもが参画する」とあるが、子どもと一緒につくっているという感覚をつかんでいくことが大切であるし、子ども・若者の意見はすごいと思うことが多くある。そういう意見を聞ける大人になることが、自分たちも成長していけるのではないかな。年はとって、子どもたちから教えてもらうことも多い。審議題は、子ども・若者・高齢者の両者にとってよい。

益川議長：今のご意見から社会教育に関わっている人たちが、どんな活動を実際に行っているのか、そしてどのように学んでいるのかということ、追究していくことも大切であると感じた。こういう人たちがつながりながら、仲間同士が増えていく社会になることが大事だと思うので、社会教育人材を発掘し、ネットワーク化を進めていけるとよい。

山本委員：子ども・若者が参画し活動し、大人を巻き込んでいくという事例が、自分の周りに増えてきている。今年からは、町内会ごとに中学生が地域の課題を考え、大人と一緒に解決に向けて活動する取組が始まっている。

「共有する、つながって相談できる」ことが大事だと考える。その点で、今回の審議題は良いと思う。令和4年度に設立された社会教育士のネットワークでは、情報共有や相談が日常的に行われ、顔の見える関係が築かれている。人材の「発掘」という表現に多少の違和感があり、良い言い回しがないか考えているところである。

橋本委員：PTAでも人材の発掘・育成と、ハンドブック Vol.3 に書いてある合言葉「できる人ができる時にできることを」が話題に挙がっている。高校生が地域づくりに前向きに取り組んでいることはすごいことだが、その子の親は興味がないということが多い。20代～40代に継承していくことが、一番難しいのではないかな。20代後半から40代をどう巻き込むかをテーマにしたり、そこをうまく巻き込んでいる事例を共有したりするとよいと思った。実際に関わってみたら、結構楽しいと思ってもらえることが、人材の発掘・育成につながるのではないかな。

裁委員：ネットワークを広げていくのは、非常に困難なことだと感じている。一番大事だと思っているのは、コーディネーターの存在である。コーディネーターが人と人をつなぎ合わせて、何か仕掛けをしていく。つなぎ合わせるのによいのが、子どもである。子どもが来るので親も参加するし、祖父母も参加するというよい点がある。自治会は親が出て行っても子どもが出て行かないので、大人たちのネットワークはできるが若者の参画がない。社会教育人材のネットワークがあつてこそ継続できる。人材を発掘することで、その方々の成果を広めることができるし、その方々の成長にもつながる。審議題にある社会教育人材（コーディネーター）の発掘・育成とそのネットワーク化は、持続可能な地域と人の成長にも必要ではないかな。

馬淵委員：PTAの課題もなるほどと思って聞いた。ある町の視察に行った時に、コーディネーターが週2回（非常勤）で、元教員だがすごく熱心にやっていた。学校が困ってる授業の丸付けのサポート等、100人ぐらいのLINEグループに発信し、学校とマッチングし

ているとのことだった。学校が困っていることを伝えれば、力を貸すという地域の方は、たくさんいる。地域にとって、学校は入りにくいこともあり、何に困っているのかわからない。そのマッチングをするコーディネーターを促進していくことはすごくよいことだと思う。各市町村の促進ができるとよい。

益川議長：社会教育主事は任用資格であり、発令されてはじめて任用される。社会教育人材は、プレーヤーはもちろんだが、コーディネーター的な役割の方をどう育成してネットワーク化していくかが、中核になるではないか。

堀江委員：子どもたちにどのように動いたらよいかを、自ら考えてもらい活動してもらったら、「これから僕たち、ここまででやれるよね。」と、やりたいと言ってくれる子どもたちが増えてきており、すごいことだと思っている。20代後半から40代の参画に対して抜けている世代をどうするかについては、まだ具体的な案はないが、子どもたちが参画したり、取組を一緒にやったりする仕掛けによって親世代も巻き込んでいけるのではないか。

山本委員：子どもたちを育てようと思いはあるが、大人が「育てよう」「指導しよう」と前面に出るとうまくいかないと考えている。大切なのは、子どもたちがやりたいことを一緒に楽しみ、その活動が楽しくなるまで待つことである。大人は結果を急ぐあまり、つい先回りしてしまう。しかし、それでは子どもは「やらされた」と感じ、自ら主体的に取り組もうとする意欲が育ちにくい。そのため、子どもたちが「やってみたい」と思えるきっかけや材料を用意し、自ら動き出すのを見守る。そして、困ったときや助けが必要になったときに、いつでも相談できる環境を整えることを大切にしている。このような姿勢は、人材を「発掘」というよりも、一人ひとりが持つ可能性や主体性を「発見」し、その育ちを支える社会教育の在り方につながると考えている。

益川議長：「10年後のビジョンを一緒につくる」という一つのきっかけがあった時に、10年後に成人している今の10代の子たちを巻き込むことが大事だと伝えれば、大人も納得してくれる。面倒臭いからいつものメンバーでやろうではなく、バランスよく10代・20代・30代・40代の代表で一人ずつ来てもらおうとよいのではないか。そうしたきっかけがあると、変わっていくのではないかと感じている。

戸上委員：個人的にクラブに入っているので、小学校に踊りを教えに行くことがある。都合で行けない時は、70代の年配の人たちが子どもたちに教えているがこの世代との関わりも大切だと思う。先ほど、学校に入りにくいという意見もあったが、最近は地域とつながろうとしている学校が増えてきていると感じる。20代・30代・40代にとっては、子育てや仕事で忙しいためいろいろなことに興味をもていなかったり、仲間内だけで大丈夫という人もいると思うので、子どもから変えていくことが一番よいのではと思う。次期審議題については、ネットワーク化や、つながりづくりが大事であることを活動する中で感じている。

守屋委員：地域で子どもたちが育ち、そして学び地域に貢献していくことを目指している。ので、特別支援学校が地域学校協働活動を進めていくことは意味があると考えている。

特別支援学校では、サポーターを募って独自に活動しているが、今日の話を聞き、社会教育人材の発掘・育成とそのネットワーク化の中で、特別支援学校もつながっていく必要があると思った。各地域の活動とつながっていくことをこれからやっていきたい。

益川議長：固いものではなく、緩やかなネットワークと言われるが、今、言われた通り幸福とは、人と人がつながり合った延長にある。

野田委員：親としての活動に参加して、そこで成功体験があると「次、また行きたい。」という気持ちになるのではないか。子どもが積極的に活動していて、親がその送迎をするだけだったが、その子どもがあまりに活発に活動するので、親もやってみようかなと思うようになった事例がある。やはり、子どもが入り口になるということである。ネットワーク化というよりもつながりの活動支援によって、「こんなことができる。」「あんなことができる。」「これは決して当たり前ではない。」等の気付きにつながると思う。

米原委員：社会教育人材の発掘・育成については、人材を掘り起こし、その人材の広がりをつくっていくとよいと思う。社会教育人材の「発掘」がよいのではないか。

井上委員：イメージを共有するためには、言葉は大事だと思っている。日々思うのは、中学生の子ども達が部活をやらなくなり、何をしているのだろうということだ。家に帰って、AIと遊んでいる状況を考えると、社会教育、地域をよくする活動をする部活やサークルがあるとよいと思う。コーディネーターの方々に、中学生のアイデアをどのように形にしていけばよいかをアドバイスしてもらい、地域の子どもの「つながり」と「きっかけ」ができる仕組みができるとよいと思う。

益川議長：事務局提案の審議題「社会教育人材の発掘・育成とそのネットワーク化 ～子ども、若者が参画する地域づくり～」について、真剣に考え、貴重なご意見をいただいた。今後、事務局提案の審議題で議論を進めていく。
事務局にお返しする。